

嬉泉の新聞

- 嬉泉の新聞／第26号／1993年（平成5年）11月発行（年3回発行）
- 発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1-30-9（〒156）
TEL 03-3426-2323
- 発行人＝石井哲夫 • 編集人＝友田篤

袖ヶ浦にモザイク壁画が完成



自然の姿



文明の姿

(記事：6ページ)

人材を育成することが社会福祉の現場において、重要なことと云う。よく仲間内で人手か人材かなどと他愛ないことを言うことがある。人材なら欲しいが人手ならいらないと言うような言い方をする。人手でもいいから欲しいというので採用したら人材はおるか人手にもならず、人手になったという。手人とは手の掛かる人という意味で、かえって人手を食ってしまうというのである。

そんな皮肉なことを言っても若い人たちにとっては、自分がどのような働きをしているのかがよくわからないために、ただ管理者や先輩達の意地の悪い皮肉にどう答えていったらよいかかわからないのである。どうも私たち指導層は、年を経るごとに、若い新人達のこととがわからなくなっていくようである。そのため常に結果をみては、嘆くことが多くなるのではなからうか。

私は、社会福祉施設というものが、人類の生み出した社会福祉戦略の拠点であり、人間の美しい心の集積を行う場所だと思っている。そのような観点に立つこの社会福祉施設に就職してくる仲間達は、選ばれた戦士であり、なんとかそ

の力を十分に発揮できるような手だてを考えていくことが望まれると思うのである。つまり社会福祉の現任訓練について工夫をすることが望まれるのである。

さて、私のところの現任訓練について語らなければならなくなってきた。繰り返し機会がある度に述べていることであるが、理解困難な発達障害児者への援助には、正しい人間心理の解明に基づく援助が望まれるのである。そのためには、個別的な関わりを深めていくための理論と実践への工夫が問

施設経営の創造性

(その十七) 石井哲夫

われてくるので、合宿や療育研究セミナーを年間それぞれ二回ずつ持つようにしている。ただどうしても不足するものは、社会化の研究である。

私の施設は、自閉症という困難な発達障害児者への援助を行う施設が中心になっていくからか、どうも集まってくる職員にも自閉的な傾向がみられるような気がする。かくいいう私もあまり人との社交的なつきあいを求めることで苦手なように思われるのである。従って

この傾向を改善していくためには、出来るだけ自ら社交的な機会を求めていくことを進めているのである。一弱小法人としては、やや出すぎたこととして、前出の自閉症療育セミナーやほほえみ基金などの事業を行っているのもそのためであるし、私も少しばかり公的な仕事に顔を出しているのもそのような背景があるのである。しかし私以外の職員は、園長クラスを除いては、どちらかという人の中に出不がらない箱入り息子や娘が多いようであるので困ってしまう。

最近では、日本愛護協会や全国自閉症者施設連絡協議会の会合には、出来るだけ役割分担を避けられないようにしたり、発表をするようにと奨めている。今年是国内会議には

主だった職員の研究発表をはじめとして、国際会議にも3人が発表できたことは上出来と考えている。まことに他愛のない話になってしまったが、そのほかに、今年から、少し方針を変えて、社会福祉法人の職員の交流とそのアイデンティティを高めるためにSF4Dとい

う専門会社に委嘱して、新たなプロジェクトを始めることになった。これは、法人内事業所の職員のアイデンティティや保護者や地域の人たちとの連帯を高めるための企画立案を行うものである。よく施設内研修と称して講師を呼んで話をしてもらうことをするが、今回は、その変形として、思い切った意識改革研修方法をとってみたいわけである。まだ始めたばかりであるが法人内にコミュニケーション委員会を設置して、コミュニケーションの積極化を図ろうとしている。どうも社会福祉施設という存在は、コミュニケーションの流れを停滞させる機能的特性を有しているの常にかこれを意識して対策を講じていかなければならないと思っているのである。

どこの施設にも変人奇人のたぐいはいるものであるが、社会性を育てにくいために、時には、極端な世捨て人型になったり、理想主義的なラディカルな反応を続けしていくタイプが現れやすいようである。これに積極的に対応することが必要と思っているのである。

私たちの

うぶと

須藤福祉センター各事業所からの報告

緊急保育

石川 章子

緊急保育とは、世田谷区福祉部の事業の一つで、保育所及び保育室に入所していない乳幼児が、緊急事態（母親の病気・家族の事故など）により短期間入所し、保育を受けるというものです。

「子どものへや」もこの事業に協力しています。これは石井所長の『地域の方々に福祉サービス』というお考えがあるからです。

○歳児が多い年や、人手の少ない時に、集団生活に慣れていないお子さんをお預りするということは、保育者にとっても、子ども達にとっても大変なことです。しかし、ここ二年半、七、八名の緊急保育のお子さんをお預りしてきて、家庭での突然に起こる様々な出来事で大人達が混乱している。そう



った状況の中での子ども達を少しでも安全に守ってあげたり、心やすらかに過ごさせてあげることの意義を感じています。

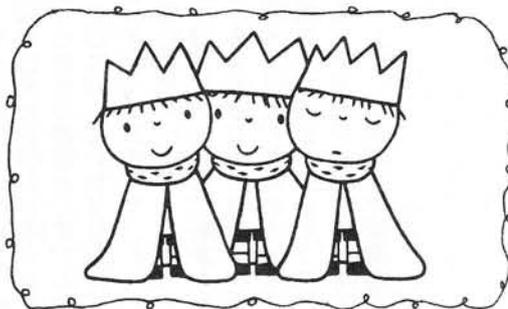
―受け入れまで―

福祉事務所に緊急保育を申し込むと、管轄内の緊急保育室と連絡をとります。（「子どものへや」は福祉事務所に）空きのある保育室の施設長の承諾を得て手続きをします。委託期間は最大限二カ月となっておりますが、二カ月を越えても保育が必要な場合は延長することもできます。

―保育―

普通入所のお子さんとは違い、慣らし保育（保育時間を少しずつ延ばしていく）の余裕がないのでいきなり八、九時間、見知らぬ集団の中で過ごす訳です。

まず初日の朝。「ママ」「おばあちゃん」「かえる」と大泣きです。連れて来た方も時間的に余裕がありませんので、暴れて汗と涙でグショグショのお子さんを抱きとって、なだめているしかありません。時々、他の子の遊びやおもちゃを見たりするのでそちらへ動く。「ワー」と泣き出しドアを指し「あっち（あそこからかえる）」そのうち泣き疲れて眠ってしまうお子さんがほとんどです。とにかく抱っこして話しかけ、知っている歌を歌い続け、という一日です。二日目、三日目となると



泣いている時間が短くなってきました。同年令の子ども達、興味のあるおもちゃ、といった方に気持ちが向き出します。『けなげだな』と思うと同時に子ども達の強さ、たくましさを感じます。

保育期間はあっという間に過ぎてしまい、職員みんなが「このままいてくれるといいね」という思いをもつのが常です。

これからも「今すぐ保育（室）が必要な子ども」だからこそ心して「子どものへや」で受け入れていきたいと思えます。

（子どものへや園長）

職員の思い

純粹な目

根岸 香

今年は一かりの学園のみのり組を担当しています。みんなと一緒に昼食を食べ終え、ほっと一息ついた一時頃、彼らが一人二人と私の回りに集まってきました。お腹もいっぱいだし何かして遊ぼうかななんて事を考えていると彼らの口からは「百円ください」「おかね」などの言葉が次々と飛び出してきます。それはなぜかというところから私が見る所の会計をしているからです。「そんな事よりテレビでも見ようよ」なんて言おうものなら彼らは必死になって詰め寄ってきます。お金を渡す前はずっとくっついてるのに、渡した途端に次の場所へと行ってしまいます。まったく現金なんだから…などと思っていると次に聞こえてきた声は「鍵、開けてください」。そういう時の彼らの表情はいつも同じで、私を見ているようで全然見ていないようです。きつと、言えばお金が出てくる、鍵が開く、そんな道具のように感じているのかも



卵とり (カンパニーの作業)

知れません。

でもそんな彼らでも時々、本心から私を見つめてくる時があります。怒ってどうしようもなくなつた時にふと向けた目や、はっと我にかえつた時の目など、その場面や状況は様々ですが、どの目もとても純粹な目をしてしています。そんな瞬間に出会う度、新鮮なすがすがしい気分になると同時に私も自分自身を見つめ直してしまいます。

日々、失敗と反省の連続ですが少しでも多くの生き生きとした目に出会えるよう努力していきたいと思っています。

(袖ヶ浦ひかりの学園指導員)

心に傷を受けておくこと

北川 篤子

私が子どもの生活研究所を訪れてから、もうすぐ3年が経とうとしています。はじめ、お子さんとの接し方も何も分からなかった私ですが、リーダーの先生のお子さんの見方、気持ちの汲み取り方に感銘を受けて、ここなら、私の理想の仕事ができるのでは、と思いました。

私が理想とすることの一つに、毎日のできごとに気持ちを向けて生活して行くこと、というのがあります。ただ流されるように与えられた仕事を処理していくのではなく、起きた出来事に気持ちを向けて関わって精一杯生きていきたいと思っていたのです。この仕事をし、お子さんの気持ち、自分の受け止め方などを感じとっていくことは、私にとって大変手応えのあるものだと感じました。

何も分からないままひたすらにやってきました。1年、2年が過ぎてきました。ところが、最近はある程度の生活の流れが分かってくる、気持ちにそれが流れそうになっていることがあります。流れにの

っていることに楽で自分の弱い部分を見付けても、「くだらないうがない」「私にはまだ、無理なことだ」と見ないようにしてごまかしたりしていることもあるようです。自分の弱点を知ることがショックで傷付きます。とても恥ずかしくて、嫌なものです。でも、きちんと心に傷を受けておかないと、甘えてしまうようです。心に傷を受けることで、その問題から目をそらせないようにしなければならぬのだらうと思います。自分の中の問題にぶつかっていかなければいけないときが来たようです。まだ、そのことを受け止め切れない甘えた自分があるようですが、この先の課題として、しっかりと心に刻んでいかなければ、と思っているとこです。

そのために、樂觀し過ぎないこと、謙虚でいること、恥ずかしさをかみしめること、自分を上手に表現すること、周りの人はどう思うか、というのを考えていきたいと思っています。

(めばえ学園指導員)

地域に支えられて

へ袖ヶ浦の

ポランティアへ

ポランティアに誘われて

三宅 文子

この春、末娘の高校卒業と同時に一日の約半分の時間を一人ですごす日が多くなりました。週二日の書道教室以外には時間を拘束されることもなく、残りの日々をどう有意義にすごそうかと、又、健康にも恵まれ多くの人の親切や励ましに支えられての今日の自分の幸せを思う時、どこかでその恩返しをしたいと考えていました。

「何かをしなれば…」とあせる一方、新しいことを始める勇気が出ないまま無駄な日々を過ごしていた時、友人からポランティアをやってみないかとの話がありました。「この時にこの話…考えてばかりいるよりは目の前にきたことを、とりあえずやってみよう」と快い返事をしたものの「ポランティア」という言葉にひっかかるものを感じていました。「強者が弱者に手をさしのべる」そんなイ

メージがどうしてもぬぐいきれず迷いましたが、このことは自分の意識を変えることでこたえられる気がし、第一歩を踏み出しました。十四年も袖ヶ浦に住んでいながら、のびろ学園の所在場所も知らず、地域とあまりかかわらないで生活してきた自分はずかしく思いました。学園での第一日目、先生のやさしい言葉かけや子供達の姿に接し、複雑な思いが交錯する世間と離れ、なぜかホッとするものを感じました。私の想像を越える大変な御苦労や葛藤のあることは、今漠然としかわかりませんが、もし私にも何かできることがあるのなら、この子達と一緒に歩んでみたい…そんな決意ができました。学園との出会いを私の人生の新たな出発の時とし、この先、五年も十年も学園生の仲間の一人とさせていただければと願っています。

パン工房ポランティア

として

小野 美恵子

八年前、娘のクラスに転校して

きたT君が私が接した始めての自閉症の子供でした。娘と一緒にテニスを習っていたので四年前に別れてからも、時々思い出す事があり、それ以来、自閉症児に関心を持つ様になりました。そんな時、「のびろ学園」のパン工房で手伝いを募集していると聞き、T君とのびろの子供達の顔が重なり、もしかしらT君の感じていた事が少しでも分るかもしれないと思い、やってみる事にしました。しかし、引受けてはみたものの果して自分出来るかどうか段々不安になっ



てきました。第一日目、胸をドキドキさせながら扉を開けると、パンとパンの焼ける匂いがし、くよ

くよ考えずにやるだけはやってみようと思えました。すでに作業は始まっていて私の最初の仕事はロールパンの成形でした。教えてもらったにも拘らず、隣の伊藤君の様にきれいな形に出来ず自己嫌悪に落ち入ってしまいました。少しづつ慣れ、回りを見渡すと一人、一人得意な分野がある事が分りました。ロールパンを任されているのは伊藤君。メロンパンのクリームから皮迄一人で作ってしまうのは中村さん。クリームパンが得意で、皮にクリームを乗せ上手に切込みを入れてるのは山田君。オールマイティで難しいコルネも丁寧に仕上げてしまうのは榎橋君。手先が器用で思わず三つ編みをしていったのかと聞いてしまう位きれいに編みパンを作るのは秋山さん。他の人の三倍位のスピードで手際良く成形してしまう宮内君。パン歴七、八年のベテラン揃いとはいえず、彼らの器用さには驚かされます。時々、鈴木先生に注意される事もあります。生き生きと動き回っている彼らの姿に、まだ心の中までは知る事はできませんが、彼らと一緒に喜びを感じるとる事は、できる様になりました。

嬉泉の出来事

〈袖ヶ浦〉

壁画の完成

前回の本欄で紹介したメキシコ在住の日本人画家竹田鎮三郎画伯による大壁画がいよいよ完成し、十月十九日除幕式がおこなわれました。ご夫妻とメキシコのお弟子さん三名が九月末に来園、日本のお弟子さんの一人を加え二十日間余りをかけて製作に取り組んでこられたのです。

壁画は二〜三センチ角の色タイル約七万五千個を組み込んだモザイク壁画で、高さ二メートル、横幅五、五メートルのものが二枚。学園の正門の左右の壁にはめ込まれました。右側は「文明の姿」と題されたもので、「思考の象徴」であるソラマメの巨大なサヤでできたお面をかぶった人間が空を飛び、上端から三日月が話かけているというユニークな作品。左側の、「自然の姿」と題された作品は、

真昼の太陽の下で、魚やオウム、イグアナなどの動物と合体した人間が空を飛行する姿が描かれています。人間にとって「文明」とともに大切な「自然」をモチーフにしたとのこと。

竹田画伯は愛知県瀬戸市の出身。昭和三八年メキシコに渡り、三十二年オハカでメキシコの自然な風土に暮らしながら画家として制作を続けてこられ、一方オハカ州自治大学芸術学校の美術部長も努め後進の指導にも当たっておられます。

今回の来日は、かねて親交のあった石井所長の依頼によるもので、全員が無報酬で制作に携わってくれたのです。

石井所長はかねてより自閉症児者の創造する作品の高い芸術性を主張しており、今回の壁画の完成で社会福祉施設が地域社会の中で魅力的な存在になっていくことを願っているのです。

竹田画伯は、石井所長のこうした理念に共鳴し、「人間にとって必要な自然と文明をモチーフに制作してみました。学園の子どもたちは純粹で素晴らしい感性を持っている。壁画が学園のシンボルとなり、広く地域社会の方たちに喜んでもらえば幸せなことです。小さな国際交流です」とおっしゃっておられます。

完成された「自然の姿」には、スペイン語で、
自然に出会うと
あなたの視界が広がり
あなたの身体は消えて
愛が生まれる
という詩がモザイクではめ込まれていました。(友田 篤)

〈子どもの生活研究所〉

夏祭り

今年も恒例の夏祭りが8月24日、夏期保育の締め括りとして行われました。

お祭りと言えばヨーヨー釣り、お御輿や山車に盆踊り。浴衣に身を包んだお子さんやお母さん、中には振じり鉢巻にはっぴ姿のいきなお祭りっ子の姿も見られ、小さな研究所の庭が活気に満ち溢れていました。

ていました。

庭の真ん中には、いつもは隅にある皆のお城・アストロキャッスルが、紅白幕で装って立派な槽に変身しています。その上で石井所長が叩く太鼓の音がより一層お祭りを盛り上げていました。

今年も板橋から職員が応援に駆け付けてくれました。

夏の一夜の楽しい思い出です。

(神保育子)

庭木の手入れ

狭い研究所の庭には、不釣合に木が鬱蒼と茂っています。「何とかしなければ」と言う意見が出ていたものの、どこからどうすればいいのやら、と思案に暮れていました。

造園業をしているあゆみちゃんのお父さんに『手の入れ方』を教えていただく御相談したところ、お父さんはこの庭の木見て、「これは素人には無理」と一言。結局、お忙しい中、2人の叔父さん方と御一緒に残暑の厳しい9月の土日に木を綺麗に刈って下さいました。

次の月曜日、出勤して来た職員も登園してきた子ども達も、庭の

木戸を開けた途端、「オッ、ワー」と声にならない声を上げた、南側から日の光が燦々と庭を照らして、風景が変わっています。御好意に感謝しつつ、明るい庭で子ども達と遊ぶ毎日です。

(小山裕子)

〈赤塚・高島平〉

高島平の納涼会

8月21日、午後7時。町内会の方々、区の福祉課の方々など、多くの来園者をお招きし、嬉泉後援会の方々がお手伝いに駆け付けてくださる中、納涼会は盛況のうちを終りました。

ホームパーティ形式で行われた今回の納涼会の趣旨は、近隣の方々をお招きし、園への理解を得、親近感を持っていただくと言うものでしたが、同時にご父兄の方々の主体的な協力を得て会をつくって行きたいという願いが強くありました。

そこで、ご父兄の連絡、取りまとめ役として準備委員を選出し、園と綿密に連絡を取り、意見を出し合って準備に当たりました。お土産の手配から、ご父兄に手料理を持ち寄ってもらう企画、手配、



納涼会

町内会の方々へのご挨拶とお誘い等々。存分に力を発揮して下さいました。

当日は、ほとんどの利用者のご両親が何時間も前から準備に取掛かってくださり、会が始まれば生ビールを出したり、綿菓子やポップコーンを作ったり、料理や飲み物を配ったりと、大忙しでした。

そして利用者達。手作りのクッキーを来園者に配るグループ。車椅子にビールやお料理を載せて配る利用者。動きにくい手を一生懸命に使ってヨーヨー釣りに挑戦する利用者。することは違っていても、何ができるといった単一の基準では測れないけれども、それぞれに

精一杯参加してくれました。そして、それを職員が専一に援助できたのは、ご父兄の惜しみない協力があつたからに他なりません。

今回の納涼会は大成功だったと自負していますが、楽しい会だったということだけでなく、利用者、職員と、そして、ご父兄の方々皆が主役になったということを何より価値あることと考えているからです。

(北川 裕)

「福祉園が地域に

開かれていく」

〈赤塚祭り次第〉

東武東上線の下赤塚駅を北口に降りて徒歩八分、しのぎき屋商店隣に我が赤塚福祉園があります。

この赤塚の地、駅前よりよく計画的に整備がなされていて、歩道に立つポールに至るまで心配りがされています。

駅前通りを使って通勤する職員は多くありません。多くは裏道、横町を思わせる商店街を抜けて福祉園に通っています。仕事を終えてこの商店街を通りますと、様々な匂いに食指が動かされ、あれこれと夕食を考えてしまう。という

職員も少なくありません。

赤塚には観光地とも言える東京大仏があります。鎌倉大仏に似たこの大仏様、鎌倉のそれに比べ黒光りしていることが特徴であります。ここに福祉園の利用者とともに散歩に出ることが多く、大仏様はすっかり私たちに馴染んだ存在となつています。この大仏様のお膝元に、植物園があり私たちの散歩に風情を添えてくれます。

整備された街づくりを印象づけながら横道を行くと活気ある商店街が続く、少し歩くと大仏様が顔を覗かせ、緑の匂いも心地よいというのが、我が赤塚の地なのです。

赤塚地区、またはその周辺の地区より通所して来る利用者は少なくありません。したがって、赤塚の住民の皆さんと親睦深い保護者の方は多いのです。

この地の利を活かして、私たちは、去る九月二五日に『赤塚祭り』を開催することが出来ました。そこには、町内会の、皆様や利用者の保護者の方が多く参加してください、地域に開かれた施設作り”の第一歩を、私たちは踏み出すことができたと感じております。

(白石雅一)

ひかりのタイムス

独立第20号

ひかりのタイムスは、嬉泉広報責任者の友田氏がアドバイザーで、利用者の山岸が編集長をしています。

赤塚福祉園の感想

山岸 裕

この施設は板橋区が力を入れていて設備はいい。食堂は広くゆったりしている。食事も美味しい。入所している利用者は、ダウン・自閉症・知的障害・肢体不自由・視覚障害と多様である。いろいろな障害の人がいる施設だ。多数の民族から成り立つ多民族国家というイメージがした。リーダーの高嶺氏は指揮者という感じがする。利用者を励ましたり、調子を見たり、職員に鞭を飛ばしたりして精神的に動いている。

生活ホームは家庭的な雰囲気があった。世話人の人も利用者も名前呼び合っている。

生活ホームは家庭的な雰囲気があった。世話人の人も利用者も名前呼び合っている。世話人の人が肢

体不自由専用の風呂や緊急一時保護室を設置したりしてキメの細かいケアをしている。ホーム・パーティーを自分達で提案したり、自発的に食事当番したりして生活を自分達で作る姿勢が感じられる。利用者は朝の6時半ごろ出勤して夕方の4時〜6時ごろ帰宅する。

利用者インタビュー

山岸「A子さん赤塚福祉園は楽しいですか」

A子さん「陶芸が楽しいです。」

このA子さんカセットテープを筆者に見せたりする。仲間を紹介する。ここが自閉症と知的障害の人の差だと感じた。人懐こく情緒的なものを感じる。

山岸「Bさんは最初赤塚福祉園に来て良かったと思いませんか」

Bさん「最初は緊張したりして慣れなかった。今は慣れた。」
山岸「C君の好きな作業は」

C君「課題の時間」(側にいた職員が園外に出てやる作業とフォロイする)

山岸「外に出て何をやりますか」

C君「福祉園の人達にいろんな話を聞いて、新聞にしてみんなに配った新聞を配るという意味」

高嶺氏へのインタビュー

山岸「今後赤塚福祉園として、やってみたい事は？」

高嶺「始めたばかりの授産所にしても地域に行く事が少ない。まだまだ両方とも遠慮がちである。例えば園の利用者・御父兄が協力して、喫茶店の様なものを作って



赤塚祭り風景

見たい。気軽に地域の人と関わりたい。

ウチは新人職員が多いので嬉泉の事業所に研修に行かせる。各事業所での実践を通して、視野を広げて嬉泉の仕事の仕方を学ぶという研修を積んで貰いたい。」

山岸「ドライブで御一緒に感じませんが、段差のある所は肢体不自由の人は苦手のようですね。旅行の時どうするんでしょう」

高嶺「肢体不自由の人は一日中家族が介助・介護しなきゃいけないから大変じゃないですか」

山岸「赤塚福祉園の指導方針は」
高嶺「基本的には受容交流療法に基づく人間性の育成を目指す。」

そして様々な障害を持つ利用者に対して、ただ生活指導を行い社会復帰を進めるだけではなく、利用者が自立に向かって安定して生活が送れるよう様々な援助して、指導や訓練を受けて伸びる可能性のあるものに、それを受けようとする気持ち育てる事

また障害者の機能の不足を補えるよう援助する事を目的とする」

☆最後に取材に御協力いただいた赤塚福祉園の皆様どうもありがとうございました。